神学部
小原 克博 ゼミ

生涯の基礎力となる「プレゼンテーション能力」と「文章力」を養う

小原 克博【神学部教授】

同志社創立以来の神学研究機関である神学部。学際的・総合的な見地から、建学の精神でもあるキリスト教研究を柱に、現在はイスラーム、ユダヤ教にも研究の対象を拡大。牧師、教師はもとより、企業人から芸術家まで、輩出した人材は驚くほど幅広い。特徴は1学年が70～80人と少人数で、学生同士の親密度が高く、教員と学生の距離が近いことだ。また特定の宗派の牧師を養成するだけの学部ではないため、クリスチャンである必要はない。

「現代社会が抱えている問題を幅広く理解する中で、学生それぞれの関心を明確にし、自ら設定したテーマについて深く掘り下げていくことが目標です」

小原克博教授がこう語るように、ゼミ全体のテーマは「組織神学」(キリスト教神学の過去・現在・未来)だが、ゼミ生1人ひとりが取り上げているのは、文学、動物、中国、ワイン…、"キリスト教"や"宗教"という共通項があるとはいえ、関連する題材は千差万別だ。この日発表した3人も、斎藤佳子さんが『沈黙』における遠藤周作のキリスト教理解」、小澤時乃さんが「動物に対する人間中心主義」、中国からの留学生、徐珊珊さんは「差別問題に対する教会への懸念」として、中国のキリスト教教会が抱える差別問題や政府の教会弾圧などについて報告した。

「このゼミは卒業論文を書くことを目的にしていて、3人の発表はそれぞれの卒論の結論に近いところまで来ています。ゼミを通して学は、自分の好きなことを存分にやるということが大事ですから、こちらから規制することはしません」と、小原教授は言う。

小原ゼミのメンバーは17人。その中には4年次生だけでなく3年次生も含まれる。3年次で卒論制作に向けての準備を始め、先輩がどのように進めていくのかを間近に見ながら4年次に上がっていく。4年次生の就職活動の様子や就活と勉強を両立させる姿を3年次で見る意義も大きい。2学年がともに学ぶゼミは、学生数が少ない神学部ならではの特徴だ。

さらに神学部の場合は、他学部のように2年次の終わりか3年次で全員をどこかのゼミに振り分ける仕組みがない。学年に関係なく、どのゼミでも自由に取ることができる。これも、自由度を最大限に保つという神学部らしい伝統からきている。

「自由は、良い面もありますが、一方でゼミを取らなかったり、真剣に参加しなかったりする場合、自分のスキルの向上につながらないというデメリットもあります。その点、このゼミは私の指導の下に卒論を書くという意思を明確にした人に限定して登録を許可しています。そういう意味では、神学部の中でも一番門戸の狭いゼミかもしれませんね」

小原教授がそう言うと、全員が大きく頷きながら笑った。

学生たちに、まず神学部を選んだ理由を聞いた。

「関西学院大学にも神学部はありますが、キリスト教しか勉強できない。同志社大学の神学部はキリスト教に限らず広域に学べますから」と言う中西啓太さんと同様、植月裕也さんも既成の枠の中に収まらない学びの自由さを理由に挙げた。「神学部は1年次に必修科目が1つだけなのです。その他はまったく自由で、これが学びたいというものを集めれば、自分だけの学部をつくれてしまうくらい」と、横田麗さんも自由さに魅力を感じたと話す。

神学部は宗教を通して世界ともつながる。「外国の人たちは日本人と違って信仰心を持っているのが当たり前。外国人と関わることに興味があるので、宗教を学ぶことが大事だと考えた」と言うのは日高由梨さんだ。

さらに神学部では、2000年以降、イスラームとユダヤ教も学べるように教育プログラムが拡大し、アラビア語に関連する科目も増加。外国語大学並みに語学のカリキュラムが充実した。「キリスト教の社会福祉に関心を持って入ったが、今はイスラム思想が専門になっている」という山本直輝さんは、1年間トルコのイスタンブールに留学した経験を持ち、英語、アラビア語とトルコ語が話せる。

今年6月、小原教授がセンター長を務める一神教学際研究センターが「アフガニスタンにおける和解と平和構築」をテーマに公開シンポジウムを開催した。その際、山本さんはアシスタントとして活躍。「タリバーンの方たちも来ていて、アラビア語で話をしました。彼らと日本庭園で団子を食べてお茶を飲んだのですが、おそらく神学部に入らないと絶対に経験できなかったことです」と言う。

神学部に入って得たことについては、田村奈々さんも「信仰に支えられている人の存在や、国を超えて同じ神様を信仰しているという事実を実際に見たり感じたりしたことで、偏見やバイアスが取れて価値観が広がりました」と語っている。

インタビューに答えてくれたのは全員4年次生。進路も気になる。

横田さんは航空会社のグランドスタッフ。竹村絵美さんは言語聴覚士を目指し、大学卒業後、さらに2年間医療系の学校へ通うという。靴の部品メーカーに内定しているという小澤さんは、「中小企業なのですが、倫理観、価値観に共感が持てる会社だったので」と、決めた理由を話す。

神学部の1・2年次生、これから神学部に入ろうと考えている高校生に、素材メーカーへの入社が決まっている植月さんの次の言葉は頼もしい。

「神学部というだけで関心を持ってもらえる。ゼミで鍛えたプレゼン能力を生かし、自分が何をやってきたのかをしっかり伝えられれば、神学部卒は大きな武器になります」

就職について、最後に小原教授が語る。

「とくにこの業界というものはなく、一般的な文系学部と同じです。学生には社会に出て行くうえで必要な基礎力を、大学時代にきちんと身につけてほしい。社会に出た後のことをイメージして、会社の中で役に立つことだけではなく、一生涯使える力を養うことが大事なのです。人前で話す力、文章に書く力というのはどの会社に行っても、場合によっては会社を辞めた後でも使えます。それを今身につけるか、それともいい加減なままで過ごすかで、人の一生は大きく変わってくると思います」